

本日の学び テーマ：「主を求めよ、そして生きよ」 テキスト：アモス5章4-15節

【理解の手がかりとして】

ヤロブアム 2 世の治世にあって北王国イスラエルは繁栄を享受していた。しかし、そこには当然のように貧富の格差の増大、そして指導者層の腐敗があった。そのことをアモスは鋭く批判した。

首都サマリアの宮廷で贅沢な生活を送っている貴婦人たちに対してアモスは語る。「この言葉を聞け。・・・弱い者を圧迫し、貧しい者を虐げる女たちよ。『酒を持ってきなさい。一緒に飲もう』と夫に向かって言う者らよ。主なる神は、厳かに誓われる。見よ、お前たちにこのような日が来る。お前たちは肉鉤で引き上げられ、最後の者も釣鉤で引き上げられる」（4:1-2）。これは指導者層に対するとっても厳しい批判である。

アモスの批判は「社会正義」の領域にとどまらず、当時、多くの聖所で行われていた宗教的祭儀にも向けられた。アモスは言う。「わたしはお前たちの祭りを憎み、退ける。祭りの献げ物の香りも喜ばない。・・・正義を洪水のように、恵みの業を大河のように尽きることなく流れさせよ」（5:21、24）と。ここには、神が全身でイスラエルの祭儀を拒絶している姿が描かれている。

注意すべきなのは、ここで問題とされているのは祭儀そのものではなく、それにかかわる人である。祭儀（礼拝）にかかわる人間の姿勢（普段の生き方）が問われているのである。「このことは、私たちが毎週守っている礼拝が、本当の意味で、『神を神として礼拝する』ものとなっているかどうかを問う言葉として、受け止めるべきでありましょう。」（大島力著『預言者の信仰』）

詩編 51 編の言葉に聞こう。「もしいけにえがあなたに喜ばれ、焼き尽くす献げ物が御旨にかなうのなら、わたしはそれをささげます。しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を、神よ、あなたは侮られません。」（詩編 51:18-19）

アモスは、当時のイスラエルの人々のエゴイズムを強く批判し、日常的・世俗的領域で「正義」を貫くことを求めたのである。もし、そのことが実行されないとするならば国は滅びるとまでアモスは考えていたようである。

5 章 4 節は有名な一節。「まことに、主はイスラエルの家にこう言われる。わたしを求めよ、そして生きよ。」（5:4）——そして今テキストの末尾の言葉がそれに具体的に対応している。「善を求めよ、悪を求めるな。お前たちが生きることがするために。そうすれば、お前たちが言うように、万軍の神なる主は、お前たちと共にいてくださるだろう。悪を憎み、善を愛せよ。また、町の門で正義を貫け。あるいは、万軍の神なる主が、ヨセフの残りの者を、憐れんでくださることもあろう。」（5:14-15）「わたしを求めよ、そして生きよ」——否定的で厳しい言葉がほとんどのアモス書において、唯一の積極的な勧告である。

それに挟まれる 5～13 節の解説をしておく。5 節:ベテルとギルガルは北王国で最も伝統的な聖なる宗教的な中心地。ベエル・シェバも巡礼地。そこに行くな、というのは形骸化

した信仰（倫理的生活を伴わない信仰の在り方）への批判である。

7 節:「裁き」（ミシュパート）とは「公道」。「正しいこと」（ツェダーカー）は「正義」。この「公道」と「正義」の空洞化こそアモスの批判したことである。「苦よもぎ」とは強烈な苦みを持つことから苦難の比喻として用いられる。——参考「いま日本人には『義』のあるべき場所に空洞しかないために、そこに照らすことで主体的に受けとめる・倫理的に自己批判をするという態度は、日本の社会全体から姿を消しているのです」「日本の国家・社会において『義』が位置をしめるべきところが空洞になっており、個としてそこを埋めようとする努力は一般的に希薄になった。」（大江健三郎）

8-9 節:星々（天体）の創造主は「闇と朝」「昼と夜」「海と地」といった対照的な存在をひっくり返しなせるお方。そのお方は「砦」（人間が「これ安全」と考えているもの）を破壊し、破滅へと至らせることができるお方。

10-12 節:その砦（町の門）の中で行われていたことは、「公平を憎み」「真実を嫌う」「弱者を踏みつけ」「過酷な徴税と搾取」→「お前たちの咎がどれほど多いか」（5:12）

13 節:「知恵ある者の沈黙」、語るべき者が語らない、「まことに、これは悪い時代だ」

繁栄の中で彼らイスラエルが失っていったもの、それは、まことの礼拝、主への信頼、感謝、心からの讃美、貧しさへの共感、隣人との分かち合い、……。今テキストは、私たちの礼拝や生活に大きな問いを投げかけるアモスの言葉である。

（聖書教育より）

「神さまを信じることと、私たちの『生き方』とは、決して切り離して考えることができません。アモスが見たイスラエル王国・・・まさに『弱肉強食』の社会でした。」（聖書の学び～真の神に立ち帰って生きること） 「人間が真の生ける神さまに立ち帰らず、勝手に振る舞い続けた結果の、神なき『弱肉強食』の世界は、必ず滅びてしまいます。」（聖書の学び～神が忘れられるとき、人間の社会は崩壊する） 「私たち一人ひとりが、このねじ曲げられた世界にあって、今生かされている場所で、真の生ける神さまの前に立ち、『正義を貫く』生き方とはどういうことなのか」（大人クラス）